「国語の力」の成立過程 XIII

——国語教育学説史研究——

野地潤家

一四　（つづき）

「国語の力」には、漱石の「文学論」からの引用も数例みられる。その一つは、つぎのように引かれている。

モウルトンは、芸術的摂理という語の中に「意識の系素の融合」という意味を現わさんと企てゝ居る。文学的建築は、作品の各系素を、系素と系素との関係に於て見るので、これを全体系として見る時には、そうした形式的関係の外に、この関係に生命を与え、意味を示現して居るもっと統一的な作用の作用があらねばならぬと感ずるのである。夏目氏の「文学論」（五一六）は意識焦点の理論を以てこの問題の解決を試みたものである。「文学的建築」という言語の聯想より其学説を引用して叙説を起す。先ずスクリプチュアの「新心理学」の中より A「例へば人あり St. Pauls の如き大伽藍の前に立ち其宏壮な建築を仰ぎ見て、先ず下部の柱より漸次上部の欄間に目を移し、遂に其最高の半球塔の尖端に至ると仮定せんに、始め柱のみ見つむる間は判然知覚し得るもの只その柱部にかぎられ、他は単に漠然と視界に入るに過ぎず。而して目を柱より欄間に移す瞬間には柱の知覚薄らぎ初めて、同時に欄間の知覚これより次第に明瞭に進むを見るべし。欄間より半球塔に至る間の現象も亦同じ。読みなれたる詩句を誦し、聞きなれたる音楽を耳にする時亦斯の如きものあり。」を引用して、B「意識の時々刻々は一箇の波形にして、之を図にあらはせば——波形の頂点即ち焦点は意識の最も明確なる部分にして、其部分は前後に所謂識末なる部分を具有するものなり」といい、又 C「識域下より識末に出て、識末より漸次に焦点に向つて上りつゝあると仮定すれば、禅に頓悟なるものあり、其説を聞くに自ら悟に近づき、自ら知らず多年修養の切、一朝機縁の熟するに逢うて俄然として乾坤を新たにすと。此種の現象は禅に限るにあらず。吾人の日常生活に於て多く遭遇し得るの状態ならざるべからず。只変化の至る迄、内に昂騰しつゝある新意識を自覚する能はざるが故に、此種の推移に逢へば之を突然といふ。表面は突然なり。去れど内実は次第なり。徐々の推移なり」（五四八）といってあるのは、意識の連続と統一との関係を説明して、文学的建築よりも内面的なる「芸術的摂理」という曖げなる考えよりももっと明かに中

核に近づかしめるに足る考え方を導くものである。更にその考えを徹底するために、天才を論ずる一節を見るに、D「常人の意識は煩瑣なる現象の紛紛として去来するに任せて朝三暮四の活計に其の生命を托す。此故に色相に駆役せられ、物華に浮沈して旋回流転し了るに過ぎず。日々に逢ふ所千緒万端なるに関はらず、其千緒万端なるに任せて順然として明滅す。かの絡繹たるものは遂に其れ鏡裏に車馬行人を写すと異なるなし。只此一箇の核を安定して金輪際に動かざるものは、此核の形に応じ此の核の質に随つて、かの浮遊限りなきの塵埃をあつめて、あるひは一元の会をなし、あるひは二元の会をなし、あるひは万有皆神の会をなし、或は物質不滅の会をなし、或は楽天の会をなし、或は悲観の会をなす。この会をなして天地を貫くとき、人生を断ずるとき、耳目に触るゝ所は常人と異なるなくして、しかも其意識する所は迥然として常人と識を異にす。彼等は意識毎に此核を以て主脳とす」（五二八～五三〇）と論ぜられるところを見ると、意識焦点の作用を明かに会得することができるかと思う。かくの如く文は瞬時に変化する意識の連続の焦点を文字に譫訳したものと考えられ、「文の形」はその連続を統一したる焦点の中核より顕現したものと見ることができる。（有朋堂版「国語の力」、一〇七～一〇九ペ、ただし、読点の脱落、語句の異同しているものについては、引用者において、適宜補った。それらの箇処はかなり多く、ここに一括して注することを保留した。）

右は、「国語の力」第二章「文の形」のうち、第九節「意識の焦点」として述べられたものである。この節には、前掲引用中のA・B・C・Dのように、漱石の「文学論」からの引用がなされ、「意識焦点の作用」を明らかにしようと試みられている。

まず、Aについてみると、これは「文学論」第一編「文学的内容の分類」のうち、第一章「文学的内容の形式」から採られている。

漱石は、文学的内容の形式について、よく知られているように、「凡そ文学的内容の形式は（F＋f）なることを要す。Fは焦点的印象又は観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象又は観念の二方面即ち認識的要素（F）と情緒的要素（f）との結合を示したるものと云ひ得べし。」（夏目漱石著「文学論」、昭和32年2月12日、岩波書店刊、新書判全集第十八巻、二三ペ）と説いている。

このFについて、漱石は、心理学者Lloyd Morganの著「比較心理学」からその所説を引きつつ、左のように述べているのである。

「さきに余はFを焦点的印象若しくは観念なりと説きしが、こゝに焦点的なる語につき更に数言を重ぬるの必要あるを認む。而して此説明は溯りて意識なる語より出立せざるべからず。意識とは何ぞやとは心理学上容易ならざる問題にして、或専門家の如きは、これを以て到底一定義に収め難きものと断言せし程なれば、心理学の研究にあらざる此講義に於て徒らに此難語に完全なる定義を与へんと試みるの不必要なるを思ふ、たゞ意識なるものの概念の幾分を伝ふれば足れり。意識の説明は『意識の波』を以て始むるを至便なりとす。此点に関してはLloyd Morganが其著『比較心理学』に説くところ最も明快なるを以て、此処には重に同氏の説を採れり。

先ず意識の一小部分即ち意識の一瞬時をとり之を検するに必ず其うちに幾多の次序、変化あることを知る。Morgan氏の語を以てせば『意識の任意の瞬間には種々の心的状態絶えず現はれ、やがては

消え、かくの如くして寸刻と雖も其内容一所に滞ることなし。』吾人はこれを事実に徴して証すること容易なり。

例へば人あり、St.Paul's の如き大伽藍の前に立ち其宏壮なる建築を仰ぎ見て、先づ下部の柱より漸次上部の欄間に目を移し、遂に其の最高の半球塔の尖端に至ると仮定せんに、始め柱のみ見つむる間は判然知覚し得るもの只其柱部にかぎられ、他は単に漠然と視界に入るに過ぎず、而して目を柱より欄間に移す瞬間には柱の知覚薄らぎ初めて、同時に欄間の知覚これより次第に明瞭に進むを見るべし。欄間より半球塔に至る間の現象も亦同じ。読みなれたる詩句を誦し、聞きなれたる音楽を耳にする時亦斯の如きものあり。即ち或意識状態の連続内容をとり其の一刻をぷつりと切断して之を観察する時は、其前端に近き心理状態次第に薄らぎ初め、後端に接する部は、これと反対に漸次其明瞭の度を加ふるものなるを知る。こは只吾人日常経験上しか感ずるに止まらず既に正確なる科学的実験の保証を経たるものとす。（尚詳しくはScripture氏著『新心理学』第四章参照）」（同上書、二五～二六ページ、傍線は引用者。）

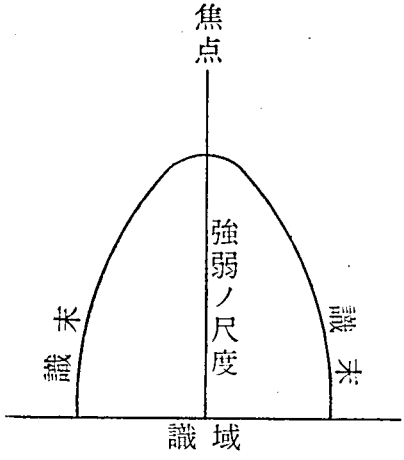
垣内松三先生は、漱石からの引用を、右のようにされたのであった。具体例（前掲、傍線部）が挙げられているのは、もちろん、その中に、「読みなれたる詩句を誦し、聞きなれたる音楽を耳にする時亦斯の如きものあり。」を含んでいればこそであろう。適切に具体例が示されていること自体は、垣内好みともいえるものではあるが。漱石の「文学論」の記述には、精細な論及が順を追うてなされているのであるが、垣内先生の裁断・引用は、かなり大胆になされているのである。

さて、Bについてみると、Aの引用部分につづく、段落の中から、採られているのである。

「意識の時々刻々には一個の波形にして之を図にあらはせば上図の如し。斯の如く波形の頂点即ち焦点は意識の最も明確なる部分にして、其部分は前後に所謂識末なる部分を具有するものなり。而して吾人の意識的経験と称するものは常に此心的波形の連続ならざるべからず。Morgan氏式をもて此連続の様を示せば、

A　B　C　D　E　F　etc.
a′　b′　c′　d′　e′　etc.
a″　b″　c″　d″　etc.

即ちAなる焦点的意識がBに移るときは、Aはaなる辺端的意識と交じて存在し、Bが更にCに転ずるときaとbとは共に意識の波の両辺となるなり。かくして余が所謂Fと称するところのもの意識中にありて如何なる位置を占むるやは、稍読者の理会したるところなるべし。



（同上書、二六ペ、傍線は、引用者。）

垣内松三先生は、引用にあたって、右の図（本文中に「上図の如し。」とあるもの）を省略し、右の本文中の「斯の如く」をも保留して、――を巧みに用い、叙述をつながれたのである。論旨を簡明にしていくためであろうか、AにもBにも、関連してみられる、漱石の引くMorgan氏の所説にも触れようとされない。

さて、Cについてみると、これは「文学論」第五編「集合的F」のうち、第二章「意識推移の法則」から採られている。「一時代の集合意識が如何なる方向に変化して、如何なる法則に支配せらるゝかを論ずる」（同上書、三三四ペ）のを、漱石はこの章の目的としていたのであるが、Cは、つぎのような一節から引かれたのであった。

「(二)の場合は厳密に論ずるとき問題とならざるが如し。如何となれば無関係なるもしくは反対なるF′の、Fに代らんとするとき、Fの発展逓次に巡行して其勢力の自から消耗するを待つべしとの仮定なればなり。Fの発展逓次に巡行するとはFのAたりBたるを意味するが故に、FのF′に推移する中間には幾多のA、B、……の横はるありて両者を直接の推移と見做し難ければなり。然れども少しく観察点を変じて、之を他方より解するとき、事実として此場合は吾人の思考に価するものとす。Fが自己を消耗すると仮定する以上はFの推移を意味するに似たりと雖ども、Fは依然として焦点を動かざるに、F′は徐々と識域下より識末に出で、識末より漸次に焦点に向つて上りつゝあると仮定すれば、a両者の関係は結果より見て同一なりと云ふを得べし。禅に頓悟なるものあり、其説をきくに自から悟に近きつゝ、自から知らず、多年修養の功、一朝機縁の熟するに逢ふて、俄然として乾坤を新たにすと。此種の現象は禅に限るにあらず。吾人の日常生活に於て多く遭遇し得るの状態ならざるべからず。b（吾人はとくに禅に於て此特別の権利を附与するの理由を認めざるが故に。）只変化の至る迄内に昂騰しつゝある新意識を自覚する能はざるが故に此種の推移に逢へば之を突然と云ふ。表面は突然なり。去れども内実は次第なり。徐々の推移なり。一代の時勢に即て此種の推移を名づけて反動と云ふ。此解釈に従へば反動は突然なるものにあらずして次第ならざる可からざるものなり。」（同上書、三三九～三四〇ペ、傍線は引用者。）

これによってみると、右の文中、a・bのような部分省略がなされており、漱石の考察の扱いとは、かなりに異なる視点から、この一節が垣内先生によって、生かされている。漱石は禅における頓悟の体験を特別視していないが、垣内松三先生においては、むしろそれに言及されているゆえに、この論及に着目されたふしもあるのではないかと、推察される。ともあれ、漱石以上に、垣内先生は、この一節にみられる、意識の連続と統一の見方を、重視されている。

夏目漱石は、意識推移の法則を、つぎのようにまとめている。

「余は集合意識の推移を究めんと欲して、先づ其基礎たるべき波動の原則に帰つて其推移の法則を明らめ、且つ之を証するに余が所謂文学的手段を以てしたり。而して余の挙げたる表現法は悉く之をこゝに応用し得るを発見せり。但し最後の写実法に至つてはFを説明するにF′を以てする――両材料を合して成る――方法にあらざるを以て、遂に之を利用するの機なかりき。推移とは少なくともFとF′の二状態を得ざれば論ずる能はざる題目なるが故なり。

此章に於て吾人の得たる推移の法則を一括すれば左の如し。

㈠吾人意識の推移は暗示法に因つて支配せらる。
㈡吾人意識の推移は普通の場合に於て数多のⒻの競争を経。（ある時はFとF′の両者間にも競争あるべし。）
㈢此競争は自然なり。又必要なり。此競争的暗示なき時は
㈣吾人は習慣的に又約束的に意識の内容と順序を繰り返すに過ぎず。
㈤推移は順次にして急劇ならざるを便宜とす。（反動は表面上急劇にして実は順次なるものなり。）
㈥推移の急劇なる場合は前後両状態の間に対照あるを可とす。（対照以外に之と同等なる又は同等以上の刺激あるときは此限りにあらず。）」（同上書、三四一ペ）

前掲引用部分（C）は、漱石の叙述でいえば、右の要約㈥に相当するものであって、意識の推移の真相を深く掘り起こそうとしたというのではない。しかし、垣内松三先生は、この一節の役割を重く見定めようとされた。そこに、垣内式の断章取義の一面がうかがわれる。

おしまいに、Dについてみると、これは「文学論」第五編「集合的F」のうち、第一章「一代に於る三種の集合的F」から採られている。「集合的意識」を、漱石は、㈠模擬的意識、㈡能才的意識、㈢天才的意識の三種にわけている。Dは、その㈢天才的意識を論じた部分から、引かれているのである。

漱石はまず、「天才的意識」について、

「㈢第三の意識を名けて天才的Fと云ふ。もし実質に就て天才のFと能才のFを区別せよと命ぜられたる時、何人も之を明瞭に定め得るものなかるべし。只余は以下の形質を帯ぶるものを一括して之に名づくるに天才的Fの称を以てしたるのみ。（読者能才と天才の用語に拘泥して無用の葛藤を胸裏に描くなくんば可なり。）

能才的Fの社会に欲迎せられて成功の桂冠に其頭を飾るに反して天才的Fは声誉を俗流に擅にする能はざるのみならず、時としては一代の好尚と相反馳して、互に容るゝ事能はざるの不幸に会す。大声は俚耳に入らずと云ひ、豚児に真珠を抛つと云ひ、馬耳に東風と云ふ。皆天才的Fの庸衆と迥かに其撰を異にせるを示せるものなり。吾人は再び焦点意識の波動説に帰つて、此種のFの他と竝馳せざる所以を究めざるべからず。

模擬的意識のFに留まつて咫尺の先を闇黒に控へたる時に当つて、能才の脳裏には、Fの将に推移すべき次期のF′を胚胎しつゝあるは前節に述べたるが如し。今能才がF′を予想しつゝあるに当つて、既にF′を焦点に意識するものありとせば此人は能才よりも一歩の早きに時勢を覚知するものなり。啻にF′を意識するのみならず、次期のF″を予想し、予想するのみならず之を意識し、更に進んでF3に及び、——F3に安んぜずしてF4に至り、遂にFnに行き得るものありとせば、此人は多数の民衆がFに固定せる間に、少数の能才がF′を予想しつゝある間に、既に幾多の波動を乗り超えてFnに馳け抜けたるものなり。FnはFの早晩達すべき駅路なるは云ふを待たずと雖ども、現在のFを有する多数より判断すれば、其間隔の余りに遠きが為めに、其現在意識の周囲を四顧してFnの影を認むる事能はざるを以て、之を評価する能はざるのみならず、且つ之を排斥せんとす。同類は相聚つて得意なり。同類中にあつて尤も縁故の遠きものより疎外し駆逐せんとの賦性を有すればなり。天才的Fの失敗と圧迫とを事実として、之を焦点意識の理論によりて解せんとする時、此説

明を以て説明の一方法とするも可なるに似たり。此説明によつて吾人の得たる凡人と天才との差違は下の如し。――凡人と天才とはFを意識するの遅速によつて決す。――凡人と天才との距離は、FとF^nとの間隔なり。Fは自然の流に沿ふて自からF^nに至るべき傾向を有するが故に、其質に於て両者の差違を定むる事能はず。此故に凡人と天才との差違は其意識する内容の質にあらずして其先後なり。但し先後は質に関係なきにあらざるが故に、もし厳密なる言語を以て之を正せば、波動を生ずる時の影響より起る、（而して他の源因より起るにあらざる）意識の内容の差違なり。例へば一人の幼時と壮時との差違の如し。一人に就て云ふが故に両者は同物なり、然れども一定の時を経過せざれば幼年は壮年に達する事能はざるが故に、両者は、時の支配を受くる点より見て、異物なり。而して少年に示すに、其少年が二十年の後必ず到着すべき体軀容姿の写真を以てするも、其距離のあまりに遠きが故に、自己を見て、自己を認識せざるのみならず、却つて之を憎まんとするが、凡人の天才に対する態度なり。（此解釈より見たる）

吾人は此解釈を以て不当なりと信ぜず。然れども之を以て唯一の解釈なりと主張する能はざるなり。凡人と天才の差は焦点意識の原理より論じて、猶二様の解釈を容るゝの余地あるが如し。前節の解釈を以てするときは、天才の意識波動は、一般の推移と只其stageを異にするのみにして、推移の過程と順序に至つては毫も矛盾せざるのみか、よく合致して戻らざるものなり。然れども吾人は此解釈を許すと共に、又かく想像するの自由なるを信ず。」（同上書、三二五～三二七ぺ）

と述べ、さらに、天才的Fの主脳としての核の問題に言及し、つぎのように述べている。

「(い)天才の意識焦点中には他人に見出し能はざる一個の核となづくべきものありて、此焦点たるFの主脳となる。此主脳の如何にして発現し又如何にして現在の状態にあるかは吾人の論ずる所にあらず。只吾人の云はんと欲する所は此核の存在なり。核の存在を仮定したる後、吾人は再び云ふ。天才のFも常人の如く推移して不断の波動を構成す。只此波動の起伏を一曲折の短かきに切断して、其焦点を検するとき吾人は常に特殊の現象に際会す。特殊の現象とは、いづれの焦点中にも此核の織素として其地位を保持するを云ふなり。此に於てFのF′に移り、F′のF″に変ずるの点に於て常人と異なる所なき焦点は、只一個の核の存在の為めに、いづれの焦点に於ても常人と異なるの奇観を呈するに至る。而して此核は数学に所謂恒数（constant）にして、其量と質に於て、終始一貫して数多の焦点を影響し去るを以て、他と同じかるべき焦点は、此一核の為めに随時随処に他と同じからざるの結果を生ずるのみならず、雑駁にして収束なきFの変化に一種の統一を与ふ。

前項に述べたる天才の、千里の遠きを視、千里の外を聴くが為に凡人と異なるに反して、此種の解釈に従へば、天才はいづれの場合、いづれの時にも会釈遠慮なくして、此自己に特有なる核を以て見、核を以て聞くが為めに凡人と異なるに至る。而して此核は恒数なるを以て造次顚沛の際にも彼の意識を離るゝ能はざるが故に、常見と反し、常識と戻る場合にも、其反戻を顧慮するの遑なきうちに、核の影響は既に一般Fを変化して自家特有のFを生ず。しかも是を以て普通に共通ならざる可からざるFと思惟する事往々なり。是に於てか彼等は時に流俗の怒を招き又其嘲笑を買ふ。或は其特色

の一種の神経病者と似たるを以て、屢彼此混同の厄に逢ふ。古より偉大なる系統は常に零碎の事実をあつめて成る。常人の意識は煩瑣なる現象の繽紛として去来するに任せて、朝三暮四の活計に耳目の生命を託す。此故に色相に驅役せられ、物華に浮沈して旋回流転し了るに過ぎず。日々に逢ふ所千緒萬端なるに関はらず、其千緒萬端なるに任せて雑然として明滅す。かの絡繹たるものは遂に是鏡裏に車馬行人を写すと異なるなし。只此一個の核を拈定して金輪際に動かざるものは、此核の形に応じ、此核の質に随つて、かの浮游限りなきの塵埃をあつめて、あるひは一元の会をなし、あるひは二元の会をなし、あるひは万有皆神の会をなし、或は物質不滅の会をなし、或は楽天の会をなし、或は悲観の会をなす。此会をなして天地を貫くとき、人生を断ずるとき、耳目に触るゝ所は常人と異なるなくして、しかも其意識する所は逈然として常人と趣を異にす。角を以て核となすものあり。枡を以て角となし、硯を以て角となすのみならず、盆を以て角となし、月を以て角となし、日を以て角となさずんば已まず。彼等の解釈は悉く角なる核に支配せらるゝが故なり。彼等は事毎に角より出立すればなり。彼等は円を以て角の変体となすが故なり。三角を以て四角の一辺を失へるものと観ずればなり。菱形を以て角度の狂へる角と思惟するが故なり。かくの如くにして天下は悉く角より成立せざるものなし。三を以て核となすものあり。彼等の云ふ所を聞けば天地は人と合して三体をなす。現在は過去、未来を併せて三世をなす。日は夜を餘し、歳は冬を餘し、時は雨を餘して三餘となす。単に是のみならず、一は三より二を減じたるものなり、四は三に一を加へたるものなり。かくの如くにして宇宙は三を以て成立せざるものなし。孝子は飴を見て親を養はんと欲す、是其核の親に存するが故なり、丐児は飴を得て銭を釣らんと欲するものなり。Don Quixoteは騎士の核を有して一生を縦貫するものなり。Darwinは進化の核を有して鳥獣を見、妻子を見、かねて天子を見るものなり。蕪村は俳句の核を有して、月日を見、星辰を見、奴婢を見、又王侯を見るものなり。彼等は意識毎に此核を以て主脳とす。此故に意識は一波に起り一波に滅して、しかも其内容は凡人と異なるなきにも関はらず、常に此核の影響を受けて一種の特色を生ず。此特色あるが為めに、常人の威厳を感ずる所に於て侮蔑を払ひ、常人の不可思議とする所に於て可思議と断ず。此故に天才に世俗と相容れざるの意識あるは此核の存在に起因すと仮定するも不可なきが如し。」（同上書、三二七～三二九ページ、傍線は引用者。）

「国語の力」に引用されたD（天才的Fについて論及したもの）は、実は漱石の述べたごく一部分を抄出したものであって、とくに「彼等は意識毎に此核を以て主脳とす。」とある本文の前には、「文学論」の原文では、かなりにない説明が挿入してあるが、それらは省略されているのである。

垣内松三先生は、右の引用Dを受けて、「――と論ぜられるところを見ると、意識焦点の作用を明かに会得することができるかと思う。」（有朋堂版「国語の力」、一〇九ページ）と述べられた。漱石は、もちろん天才における意識作用の一つの見方として、「核」の論を展開しているのであるが、垣内先生は、「意識焦点の作用の究明・会得に資しうる論究と受けとめられる。

さて、垣内松三先生は、「文の形」の源泉としての「意識の焦点」

を考究するにあたって、モウルトンの論のほか、夏目漱石の意識焦点の理論を、その著「文学論」から、A・B・C・Dと引きつつ、「かくの如く文は瞬時に変化する意識の連続の焦点を文字に飜訳したものと考えられ、『文の形』はその連続を統一したる焦点の中核より顕現したものと見ることができる。」（有朋堂版「国語の力」、一〇九ペ）とまとめられた。漱石の意識焦点の論を、的確に要約し、その論旨を正しく踏まえて、論陣を進めるといういきかたではない。「文学論」からの引用A・B・C・Dは、いずれも垣内好みの具体例もしくは論述がなされているものに限られているともみられる。引用に際しての、垣内松三先生の眼光の鋭さを感ずるとともに、かなりに断章取義が行なわれているのを感ずる。

つぎに、「国語の力」には、「文学論」から、左のように引かれている。

六　間隔論　動詞の時・法・相等を説明するのはこれまでの文法の分担するところで、その意味に於てはこの叙説の目的ではない。然れどもそれ等の言語に由って現わされて居る活力を見る立場からいえば、エルチェ式研究法の文法的解釈に於て欠けて居るところがある。それに関して夏目氏の間隔論は興味ある考えである。曰く、

A　例へば格闘の如し。千里を隔てゝ、編紙の上に之を読む何等の興味なし。時間もしくは空間の隔りを払って之を現代に移すか、又は自国に運び来るかに因りて幾分の活気を添ふ。即時即席之を観るに及んで始めて拍案の概あり。是に於て読者と編中の人物との距離は時空両間に於て他に妨げなき限り接近せしむるを幻惑を生ずるの捷径とす。

B　時間に於て距離を短縮するの一法として作家の慣用するは歴史的現在なり。C　――歴史的現在と併立して吾人の注意を要求すべきは空間短縮法にして、而も彼が如く一般の顧眄に価せざる如き観あるは、歴史的現在に匹敵すべき方便の此方面に発見せられざるに因るか。思ふに普通の作物に在っては著者の紹介を待つて始めて、編中の事物、人物を知るを例とす。著者の彼と呼び彼女と称するものは必ず著者に対して一定の間隔を保つを示すもの、而して其著者と吾人読者とは亦一定の間隔に立つが故に、吾人と編中の人物との間には二重の距離を控へたるは明なり、――D是に由って之を観れば空間短縮法の一方は、中間に介在する著者の影を隠して読者と編中の人物とを当面して対坐せしむるにあり。――E形式に現はるゝ編中人物の位地を変更するとは、彼と呼び彼女と称して冥々に疎外視するものを変じて汝となし、更に進んで余と改むるに過ぎず。――F彼を以て目せられたる人物の、呼ぶ人より遠きは言語の約束上然るなり。此故に彼を変じて汝となす時、現場に存在せざる人物は忽然として眼前に出頭し来る。然れども呼ぶに汝を以てする時、彼是の間に猶一定の距離あるを免れず。只汝の我に変化する時、従来認めて以て他とせるものは俄然として一体となって、些の離蔣に隔てらるゝ事なし。此故に彼は編中の人物を読者より尤も遠きに置くものなり。汝はこれを作家の眼前に引き据ゑるの点に於て其距離を縮め得たるものなり。最後に余に至りては、作家と編中人物とは全く同化するが故に読者への距離は尤も短縮せるものなり。（文学論四七五～五一〇）

（有朋堂版「国語の力」、一三八～一四〇ペ、A～Fは、引用者

において便宜これを付した。）

右は、「国語の力」第三章「言語の活力」のうち、第六節「間隔論」の大半である。漱石の「間隔論」は、もと「文学論」第四編「文学的内容の相互関係」のうち、第八章において論述されたものである。前掲引用A～Fは、その第八章からなされている。

まず、Aについてみると、この段落は、漱石の「間隔論」のうち、つぎのような叙述から採られたものである。

「（前略）是に於てか不完全ながら余の論じ得べき幻惑の諸法は略ぼ悉くせるに近し。只だ一事の之に附加して云ふべきあり。間隔論是なり。間隔論は其器械的なるの点に於て寧ろ形式の方面に属すると雖ども純然たる結構上の議論にあらず。章と章、節と節の関係より起る効果を考量するにあらずして、寧ろ篇中の人物の読者に対する位地の遠近を論ずるものとす。但し篇中の人物は、単に読者に対してある位地を保たざる可からざるのみならず、又篇中の事件及び他の人物に対してある位地を保たざる可からざるが故に、単に読者のみを眼中に置いて、之を適当の位地に立たしむるときは、たとひ読者の歓を買ふ事此点に於て顕著なるにもせよ、他の方面に於て作家は、より大なる犠牲を敢てせざるを得ざるに至る。従つて其応用は前段の諸法の如く普遍ならずと知るべし。

取材の幻惑は材そのものゝ質に由つて決す。表現の幻惑は技そのものゝ巧を待つて定まる。間隔の幻惑は距離其ものゝ遠近に支配せらる。間隔の幻惑は質にあらず技にあらず単に位地にあり。故を以て前両者の如く優勢なる能はず。又任意に使用する能はざるを以て前両者の如く便利ならず。然れども理論上遂に其功力を否定し能はざるは事実なりとす。例へば格闘の如し。千里を隔て、百年を隔てゝ、故紙上に之を読む何等の興味なし。時間もしくは空間の隔りを払つて之を現代に移すか、又は自国に運び来るかに因りて幾分の活気を添ふ。即時即席之を観るに及んで始めて拍案の概あり。是に於て読者と篇中の人物との距離は時空両間に於て、他に妨げなき限り、接近せしむるを以て幻惑を生ずるの捷径とす。」（夏目漱石著「文学論」、昭和32年2月12日、岩波書店刊、新書判全集第十八巻、二九九～三〇〇ページ、傍線は引用者。）

ここで、垣内松三先生は、間隔の幻惑についての定義・説述を引用するのではなく、それに関する「格闘」の例による説明を引かれたのである。すなわち、垣内好みの例が採られているとみてよい。

つぎに、Bについてみると、「文学論」には、前掲Aにつづいて、すぐつぎの段落に、「時間に於て距離を短縮するの一法として作家の慣用するは歴史的現在の叙述なり。」とあり、「の叙述」が省かれて、「歴史的現在なり。」となっている。しかも、それにつづく、「文学論」の漱石の弁明――「何人の創意に成るを審かにせずと雖ども、其常套の慣手段なるは坊間行はるゝ所の修辞学を読んで知るべし。此他に時間を短縮し得るの良策あるや否やは未だ考へず。去りとて此陳腐なる技巧を今更の如く論議するは徒らに紙筆に災するの挙なるを以て措く。」――は、省かれている。

こうして、漱石は、「空間短縮法」について、つぎのように述べていく。

「歴史的現在と併立して吾人の注意を要求すべきは空間短縮法にして、しかも彼が如く一般の顧眄に価せざる如き観あるは、歴史的現在に匹敵すべき便法の此方面に発見せられざるに因るか。思ふに

普通の作物に在つては、著者の紹介を待つて始めて、篇中の事物、人物を知るを例とす。著者の彼と呼び彼女と称するものは必ず著者に対して一定の間隔を保つを示すもの、而して、其著者と吾人読者とは亦一定の間隔に立つが故に、吾人と篇中の人物との間には二重の距離を控へたるは明かなり。譬へば電話機に他と語るが如し。交換手の聯旋を待つて始めて彼我の意を通ずるに過ぎず。吾人の耳目は常に自から聴き自から見て其聰明に誇らんとするもの、著者の指摘を待つて始めて彼を知り彼女を知るは、わが耳目の聰明を奪はれたるにひとし。わが耳目の自由なる活動を阻礙せられて、わが能力の非凡なるに誇らんとする凡ての機会を失へるものゝ、かしこに著者を控へ、其著者のかなたに又篇中の人物を控へて遥かに之を望むの已を得ざる時、著者の彼と指し此と教ふるものを疎外するは勢の免かれ難き所なり。D是に由つて之を観れば空間短縮法の一方は中間に介在する著者の影を隠して、読者と篇中の人物とをして当面に対坐せしむるにあり。之を成就するに二法あり。読者を著者の傍に引きつけて、両者を同立脚地に置くは其一法なり。此時に当つて読者の目は著者の目と合し、其耳亦著者の耳と化するが故に、かれの存在は毫もわが聰明を妨ぐるに足らずして、二重の間隔は短縮して其半ばを減ずるに至る。或は読者を著者の傍らに引くに代ふるに、著者自から動いて篇中の人物と融化し、毫も其介在して独存するの痕迹を留めざるが如き手段を用ふ。此時に当つて其著者は篇中の主人公たり、若しくは副主人公なり、もしくは篇中の空気を呼吸して生息する一員たり。従つて読者は第三者なる作家の指揮干渉を受けずして、作物と直接に感触するの便宜を有す。」（同上、新書判全集第十八巻、三〇〇～三〇一ページ、傍線は引用者。）

右のように、「国語の力」に引かれたCについてみれば、読者と篇中の人物との間に二重の距離を控えていることについて、電話機を例にとって説明している部分は、省かれているのである。

その省略部分にすぐつづいて、Dが引かれ、それに接続している、二つの方法を説く部分もまた、省かれているのである。具体的にしていくための、例・説明は、垣内松三先生がむしろ好んで引用されたのであるが、ここでは省略されている。

つぎに、E・Fについてみると、これらは、漱石の「間隔論」のうち、左のような部分から採られている。

「形式的間隔論をなさんが為めに挙げたる二方法は是に於てか逆行して作家の態度となり、心的状況となり、主義となり、人生観となり、発して小説の二大区別となる。深く此裏の消息に通じて、題相応の哲理的論弁をなさんとせば幾多の材料と思索と解剖綜合の過程に待たざるを得ず。余が現在の知識と見解とは此点に向つて一箸をだに下し能はず。徒らに此大問題を提供して研究の余地を青年の学徒に向つて指示するに過ぎざるは遺憾なり。

哲理的間隔論は余の能くする所にあらざるを以て、再び前述の二方法に帰つて形式の方面より此方法の如何なる様姿を以て作物の上に現はるゝかを検せんと欲す。案ずるに第一法は読者と作家（篇中の人物と独立せる）との間隔を打破するにあるを以て、形式の上より見て、之に叶へるものを発見する事難しとす。然れども第二法に至つては篇中人物の位地に関連し来るが故に、此等の位地を変更して、作家との間隔を短縮するを得べく、短縮の結果として零の答を得る時、作家は変じて篇中の人物と化するが故に読者と篇中人物とは作家を離れて対坐するに至るべきなり。要するに交渉する所は読

者、作家、篇中人物の三織素にして、形式にあらはるゝは、此三織素のうち、篇中の人物のみなるが故に、もし動かし得る者ありとすれば、之を措いて他に何等の動くべきものゝあるべき理由なければなり。

E 形式にあらはるゝ篇中人物の位地を変更するとは彼と呼び彼女と称して冥々に疎外視するものを変じて、汝となし、更に進んで余と改むるに過ぎず。従つて頗る器械的なり。然れども単に此称呼を更ふる丈にて間隔の縮小するは何人も否定し能はざるの事実なりとす。彼とは呼ばれたる人物の現場に存在せざるを示すの語なり。F 彼を以て目せられたる人物の、呼ぶ人より遠きは言語の約束上然るなり。此故に彼を変じて汝となすとき、現場に存生せざる人物は忽然として眼前に出頭し来る。然れども汝とは我に対するの語なり。呼ぶに汝を以てするとき彼是の間に猶一定の距離あるを免かれず。彼に比すれば親密の度を加ふる事一級なるも遂に個々対立の姿を維持するに過ぎず。只汝の我に変化するとき、従来認めて以て他とせるものは俄然として、一体となつて些の籬蕃に隔てらるゝ事なし。此故に彼は篇中の人物を読者より尤も遠きに置くものなり。汝は之を作家の眼前に引き据ゑるの点に於て其距離を縮め得たるものなり。最後に余に至つて作家と篇中人物とは全く同化するが故に読者への距離は尤も短縮せるものなり。

彼を変じて汝となすの法は所謂書翰文体（Epistolary form）の小説によつて文界に出現せるが如し。書翰を以て一篇の小説を構成するとき篇中の人物は彼是を呼ぶに汝を以てするが故に、読者は汝と呼ぶ人を通じて、汝と呼ばれたる人と対坐する事を得。然れども書翰文体は此点に於て利益あるにも関はらず他に大なる不便を冒さざる可からざるを以てRichardson以後此法を踏襲せるもの少なし。もし夫れ此不便なくして此形式を常用し得るものは脚本のみ。脚本は首尾を通じて問答より成るが故に篇中の人物は相互を呼ぶに汝を以てせざる可からずして、此点より来る利益を十二分に収め得るものとす。或人告げて曰く小説の頁を翻へして会話あるは読み、会話なきは読まずと。ある人の言は一般読書子の嗜好をあらはすものと云ふて不可なきが如し。即ち此間隔短縮法の如何に人を動かすに効力あるかを見るべし。但し篇中の人物が相互に汝と呼ぶは、作家が篇中の人物を呼ぶに汝を以てすると異なり。作家が汝と呼ぶときは読者作家の傍らに立ちて汝を見るに過ぎずと雖ども、此作家は篇中の人物を汝と云ひ得るが故に、眼前の人物と共に同空気に生息するは明なりとす。茲に至つて作家は遂に篇中人物の一員たらざるを得ざるが故に、幻惑の程度より云へば篇中の人物が相互に汝と呼ぶ場合と異なるなし。

若し夫れ作家にして終始一貫して篇中人物を呼ぶに汝を以てする事を得るとせば、作家が変じて余となつて篇中にあらはるゝの場合ならざるべからず。余の先きに挙げたる作家と作裏の一人とが同化せる場合即ち是なり。作家もし此法を用ゐるときは吾人と作家（即ち余と称するもの）とは直接に相対するが故に事々切実にして窓紗を隔てゝ庭砌を望むの遺憾なきを得るに近し。もし文学史に於て此種の作例を求むれば其数枚挙に遑あらず。時人其陳腐にして却つて其効果を疑はんと欲するが如し。俗に所謂写生文なるものは悉く此法を用ゐて文をやるに似たり。其主張の如きは敢て聴くを得ざるを以て論議すべからざるに似たりと雖ども、余を以て之を見るに彼等はしかせざる可からざる源因あるに似たり。彼等の描写する所は筋

として纏まらざるもの多し。即ち篇中の人物が一定の曲線をゑがいて一定の落所を示す事少なく、其多くは散漫にして収束なき雑然たる光景なるを以て興味の中心たるは観察者即ち主人公ならざるべからず。他の小説にあつては観察をうくる事物人物が発展し収束し得るが故に読者は之を以て興味の中枢とするを得べきも、写生文にあつては描写せらるゝものに満足なる興味の段落なきが故にもし中心とも目し得べき説話者（即ち余）を失へば一篇の光景は忽ち支柱を失つて瓦解するに至るべし。此故に読者は只此余（作家として見たるにあらず、篇中の主人公として見たる）に従つて、之をたよりに迷路を行くに過ぎず。此大切なる余は読者に親しからざるべからず。故に余ならざるべからず。彼なるべからず。

卑近なる間隔論は略悉くすを得たり。但し是とても一般の理論に過ぎず。此理論の応用に至つては固より千差万別にして作家の手腕を待つて始めて発揮すべきのみ。」（同上、新書判全集第十八巻、三〇二～三〇五ページ、傍線は引用者。）

Eのすぐあと、三文を省略し、つづいて、Fが引かれているのである。そのFの中にも、一部（前掲、波線の部）省かれている。D——→E——→Fへと、垣内松三先生は、漱石の説く「空間短縮法」の一つを、巧みにつないで、その要をとらえ示そうとされたのである。要を示すところに眼目があったから、Fの部分のつぎに、漱石みずからかなり力をこめて説いてくる具体的なことは、引用のほかに置かれることとなった。

垣内松三先生は、言語の活力を見ていく立場の一つとして、夏目漱石の「間隔論」を「興味ある考え」として、A～Fにわたり、引用された。それは、みずから、「これは広義に於ける間隔論であるが、」と、ことわっていられるとおりであって、漱石が精細に論述している「間隔論」の細部に立ち入ることを目ざしたものではなかった。漱石の説く「間隔論」の方法論に魅かれて、その作品・文章の成立・機構に関して、考え方をとらえようとされたかのごとくである。

引用A～Fは、「文学論」第八章　間隔論　からなされているが、それもほぼ前半から採られている。B——→C——→D——→E——→Fを、——でつないで、「間隔論」のうち、時間・空間の短縮法、とりわけ空間短縮法を、巧みにまとめられたのは、独自の引用法というべきであろう。ただ、このようにまとめて引用するだけで、それらにつき、垣内先生みずからの論究がそえられていないのも、めずらしい。

つぎに、「国語の力」の第三章　言語の活力　のうち、第一六節には、「文学論」からの引用が、左のようになされている。

一六　同意語の識別　具体的例証としてローゼット式辞典を批評することから、同意語の識別の問題に深入りしたが、茲にいおうと思うことは、素より辞書編算法の問題ではない。文の中に示されて居る言語の上に、作者がいおうと思ったことを、どこまで精しく正しく美しくいい現わし得たかを見ることが主題であって、それを注意すると同時に、そこから生ずるいろ～の疑問を明日に整理しなければならぬ要求が生れて来る。語彙の豊富にされることや、言語の知識を収得することはその自然の結果である。

その一着手は、求むる言語の意味を辞典の上に見出すことであっ

て、文の上に於ける適切なる解釈を求むるためには、それ等の同意語の微妙なる差異を識別する力を常に精練せねばならぬ。夏目氏が A「aとoとの母音の間には無限の中間母音介在して、甲乙の二人任意に其中間の音を撰む時、此両者が一致することは極めて稀なるに似たり」といい、B「厳格の意味に於ては婦人の所謂立派なる『人』は男子の所謂立派なる『人』と一致符合せざること多かるべく、青年の所謂『女』は老人の所謂『女』とは大に其趣を異にすべし。而して此等の差違は言語の抽象の度合に伴うて進むものにして、かの抽象の極なる哲学の如きものにありては、たゞ一つの言葉の意義に関してさえ浩瀚なる大著あること不思議ならず」（『文学論』）といわれたのも、こゝに併せて考えて見たい。同意語として一括する言語の中にも、精緻なる差異のあることは我々の熟知するところであるが、C「人心の曲線の絶えざる流波を、これに相当する記号にて書き改むるにあらずして、此長き波の一部分を断片的に縫い拾い」（同上）たる言語を語記的に機械的に学習するのは、既にその態度が誤まって居るのである。D文の内面を流るゝ意識連鎖をたどりて、その精緻なる意味を捉えることを工夫せねばならぬ。（有朋堂版「国語の力」、一六二～一六三ペ、傍線は引用者。）

右の文章中のA・Bは、漱石の「文学論」第三編　文学的内容の特質　の「序章」の中に、つぎのように述べられていた。

「次に同一の現象も異れる国民の間には著しき相違を以て現はるゝことあり。而して其原因は前に述べたる組織状態、習慣等の差違に求むべきこと勿論なり。かの同一の言語が時に同一のFを代表せざることあるも此種の差違の一例たるのみ。余は之を名づけて『解釈の差違』とす。凡そ吾人の周囲を廻転する森羅万象は風の落葉を捲くが如く旋行推移するものにして、其間に変化多く且其変化は不断にして常に流動の状態にあり。而して吾人が筆紙に上すべきは此無数の変化の一現象をとらへ之を脳裏に印するものなれば、甲が一物につき捕へたる一現象は乙が同一の現象につき捕へたる点と大に趣を異にするは、尚 Aaとoとの母音の間には無限の中間母音介在して、甲乙の二人任意に其中間の音を選む時、此両者が一致すること極めて稀なるに似たり。こゝに於て甲の所謂国家は乙の所謂国家と其内容、範囲に於て異なることあるべく、aの『人間』に対する解釈はbのそれと大に趣を異にすることあるべし。我は吾が過去の因果により一物を解釈し、彼は彼の業障により他の解釈を試むるならん。Dr. Murrayが歴史的着眼点より一大英語字典を作りつゝあるは人の知るところなるが、かゝる著作が文界の一事業として存在し得る所以は言語の歴史的推移の只ならざるを証し得て余りありと云ふべし。単に古今の差、即ち歴史上同一の開化潮流の配下にありし国民に於てすら如此き多様の変化あるを知らば、東西文化全く其趣を異にする日本と西洋との間に一方ならざる解釈の差違あるべきは無論のことなりとす。更にB厳格の意味に於ては個人の間にも亦同様の差違存在すること自明の理にして、婦人の所謂『立派なる人』は男子の所謂『立派なる人』と一致符合せざること多かるべく、青年の所謂『女』は老人の所謂『女』とは大に其趣を異にすべし。而して此等の差違は言語の抽象の度合に伴なうて進むものにして、かの抽象の極なる哲学の如きものにありては、たゞ一つの言葉の意義に関してさへ浩瀚なる大著ある事不思議ならず。

以上を約言すれば、凡そ吾人の意識内容たるFは人により時によ

り、性質に於て数量に於て異なるものにして、其原因は遺伝、性格、社会、習慣等に基づくこと勿論なれば、吾人は左の如く断言することを得べし。即ち同一の境遇、歴史、職業に従事するものには同種のFが主宰すること最も普通の現象なりとすと。」（同上、新書判全集第十八巻、一七一～一七二ページ、傍線は引用者。）

右のように、「国語の力」に引用された、AとBとの間には、かなりの省略がなされていたのである。漱石が論究したいくつかの例のうち、母音のこと、「立派なる人」、「女」などが選ばれているのは、やはり垣内松三の選択眼によるものであろう。「国語の力」の内容・性格にふさわしいものが選ばれているのである。

なお、前掲の文章中のCについては、同じく漱石の「文学論」第三編　文学的内容の特質　の「序章」の中に、つぎのように述べられていた。A・Bにかかわる原文の、さらに前の部分にあたる箇処である。

「而して此一部分たる個人意識のうち、大半はたゞ漫然たる自覚に止まるか、又は新陳交謝の際主人公たる当人にすら看過されて其侭に消え去ること多きが故に、言語に化し相互の意志を通ずる具に供せらるゝ焦点的意識の量は比較的僅少なるものなり。（如何に多辯の人なりと雖も。）況や筆紙の上に其影を残すものに於てをや。如此く文章の上に於て示されたる意識は極めて省略的のものなるを以て、仮令短時間の心的状態と雖も其一々の推移を遺憾なく文字を以て聯続的に描し出ださんことは到底人力の企て及ぶところにあらざるべく、かの所謂写実主義なるものも厳正なる意義に於ては全然無意味なるを知るべし。素人の考を以てすれば吾人の心に浮かぶ意識を其侭有体に紙上に写すことは左程困難ならざる様思はるべけれど、試みに静坐して吾が脳裏に出現し来る所のものを迫究する時は其意外に煩雑なるに驚くべし。かの宗教家が無念と云ひ無想と唱ふるは皆此妄想雑念の世の中を知り尽して始めて口にし得べき言語なり。走馬燈の如くに廻転推移して、非常の速度中に吾人意識の連鎖を構成する成分を一々遺漏なく書き出ださんことは決して人間業にあらず。仮令数分間たりとも汝が意識の内容に漠然と起り来るものを悉く記載せんと試みよ。汝は遂に筆を抛つに至るべし。

此故に言語の能力（狭く云へば文章の力）は此無限の意識連鎖のうちを此所彼所と意識的に辿り歩きて吾人思想の伝導器となるにあり。即ち吾人の心の曲線の絶えざる流波をこれに相当する記号にて書き改むるにあらずして、此長き波の一部分を断片的に縫ひ拾ふものと云ふが適当なるべし。」（同上、新書判全集第十八巻、一七〇～一七一ページ、傍線は引用者。）

「国語の力」に、「人心の」とあるところは、「文学論」の原文では、「吾人の心の」となっていた。――「心の曲線の絶えざる流波を」というように始まる、かなり長い一文の、漱石流の述べ方に対して、垣内松三先生は、ひととおりではない共感を抱かれたようである。それは深い共感をおぼえたうえでの引用であったとおもわれる。

前掲「国語の力」のDの部分についてみても、そこに用いられている「意識連鎖」の語は、「文学論」にすでに使用されていた（前掲、「文学論」からの引用参照。）。

漱石が論述しているのは、主として、文学的内容の特質（意識を中心にした）ならびにそれを表現せんとする言語の能力についてであったが、垣内松三先生は、とりわけ、同意語の識別に関して、漱石の所論の一節を、鋭く截り取って、生かしていられるのである。

つぎに、「国語の力」には、「文学論」からの引用が、左のようになされている。

1「『真正なる批評は直下に会得したものを退いて解剖したものに過ぎない』と他の場合に夏目氏のいわれた語を思いくらべて見ると、以上の解剖の前に既に直下の会得がある。沙翁のレンズを透して長時間と広空間を一眸の裡に収めて居られると見ることもできる。その精緻なる解剖の結果として確められたものは既に直下に会得されたものであって、その結論はその再構成であると見られる。」（有朋堂版「国語の力」、一　解釈の力　一〇　センテンス・メソッドの理論的基礎　三二ペ、傍線は引用者。）

2「読方の心理学的実験に徴するに、スタウトの黙会　Implicit apprehension の如き作用に依りて、読方の自然な作用に於て心の面前に現わるゝの文の文意Total meaning である。それから文の部分的・継続的表現が意識に上ると見ることができる。文に面して最も直接的に接触するものは文の全一なる統一である。夏目氏が、真の批評は直下に会得したものを分析したものであるという意味も、これをいうのであろう。センツベリーが、批評家の第一の要件は、印象を受け得る力があることであるといったのも、同じことをいうのであろう。」（有朋堂版「国語の力」、一　解釈の力　二四　解釈の着眼点（一）　六七ペ、傍線は引用者。）

右の1・2に引かれている、漱石の「真正なる批評は直下に会得したものを退いて解剖したものに過ぎない。」の立言は、「文学論」第二編　文学的内容の数量的変化　第三章　fに伴なふ幻惑　において、なされている。それは、つぎのような論述の中に出てくるのである。

「（前略）一言にして之を云へば吾人は沙翁を読むにあたつて、又古代の名画を観るに方つて、面白しと感ずる丈其丈冥々裏に知的分子の除去を履行しつゝあるものなり。

かくの如きは其の最も極端の例なり。今少しく真に近き作品に於ても亦吾人は盛に知的分子の除去を実行しつゝあるを見るべし。批評家動もすれば作品の結構、人物の性格等に関して不自然との批難を呈出して毫も仮借する所なきに似たり。去れど文学と名のつくものに彼等の所謂真以外の分子を含まざるはあらず。否此等評家が視て以て真なりとする作品に於て却て其の甚しきを見る。会、評家に攻撃の余地を与ふるは知的分子を除去せしむるに足るべき他の特長を欠くが故なり。もし何物か他に此欠点を補ふものあらば決して真正の評家より批難せらるゝの虞なきものとす。真正なる批評は諳読の際直下に会得したるものを退いて解剖せるに過ぎず。直下に会得せしむる際に知的分子の不用意にも入り込めぬ位に評家の心を他に誘ひ得ば、如何に不条理なりとも不合理なりとも遂に真正の評家より批難せらるべきにあらず。而して文学は此種の作品にて充満する事亦一点の疑なきに似たり。」（新書判全集第十八巻、一五四～一五五ペ、傍線は引用者。）

この漱石の論述は、作品（文章）の鑑賞（解釈）における「知的分子の除去」のことを中心に進められているが、垣内松三先生は、それらのうち、とくに「真正なる批評は諳読の際直下に会得したるものを退いて解剖せるに過ぎず。」に目をとめられ、それを自己の

解釈観の中に的確に位置づけられたのである。ただ、「文学論」の原文には、「誦読の際」とあるのに、引用では省かれている。このことは、小さい問題ではないけれど、漱石の鑑賞論・批評論の中から、垣内先生の琴線に触れたところを、みずからの解釈観の定立に役立つように採られたということであろう。

ともあれ、精緻をきわめた漱石の論及の中から、随意に引用して、垣内先生みずからの立論に役立てられている点は、垣内先生の漱石の論述に対する吟味・潜入の尋常ではなかったことを、ものがたっている。

以上、見てきたように、「国語の力」には、夏目漱石の「文学論」(明治40年〈一九〇七〉5月、大倉書店刊、時に漱石は四〇歳)からの引用が数多くなされていた。意識焦点の論にしても、間隔論にしても、同意語の識別に関する言語能力の論にしても、批評論にしても、すべて漱石の独自の論述がなされており、それらを、漱石の論述の流れにそうて採録するよりも、垣内先生みずからの論にひきつけつつ、大胆にかつ巧みに引かれ、みずからの論述をいっそうゆたかにされたという感が深い。それはまさに垣内流の断章であり、活用であったといってよい。とはいえ、「文学論」に親しみ、「文学論」の細部にまで鋭い眼光を注いで、その立論、その内容を自在によく見ぬいていればこそ、こうした「文学論」のかなめ・かなめをおさえての採録・活用が可能になったとおもわれる。「国語の力」の成立に、漱石の「文学論」が直接・間接に影響していることは、見のがせない。また、漱石の「文学論」の独自性は、垣内松三先生の「国語の力」を通じて、かえってよく生かされている面のあることも、否定しえないであろう。(昭和43年7月19日稿)(本学教授)